編集後記

学ぶ心さえあれば、万物すべてこれわが師である。
語らぬ石、流れる雲、つまりはこの広い宇宙、この人間の長い歴史、
どんな小さいことにでも、どんな古いことにでも、
宇宙の摂理、自然の理法がひそかに、脈づいているのである。
そしてまた、人間の尊い知恵と体験がにじんでいるのである。
これらすべてについて学びたい。

松下幸之助

昨年度は、東日本大震災の記憶が重くのしかかっていた、今年度はリーマンショックから景気回復に向かっていた我が国経済に、円高の重圧がのしかかりつづけ、失われた 20 年という言葉が真実味を増し、さらに家電産業の没落あるいはメイドインジャパンの終焉を迎えたかのような暗いイメージが充満したような状況であった。

ところが、安部政権の誕生以来、アベノミクスという言葉が先導したかのように、為替レートも円安にふれ、この 100 日間は積極的な発言が続いてはいるが、統制を乱すような発言や失言も無く、その是非は別にして自民党専断時代の落ち着きが感じられ、世の中に安堵感が戻ってきたように感じられる。一方で、旧態以前のままでは、我が国の将来に明るさを取り戻すことはないという不安は高まっているともいえよう。巻頭言に紹介した毛利衛日本科学未来館長の発言は、それを象徴しているものといえよう。この 2012 年度学会誌にも、そのことが如実に示されているといえよう。

また、この号で初めて「研究ノート」を掲載した。多くの会員の積極的な投稿を期待したい。一つのコミュニティとして成長していくためには、自由な雰囲気の中での意見交流が欠かせないと思うからである。さらに、昨年度から、学会誌をホームページに搭載することにした。

http://www1.m.jcnnet.jp/multi-disciplinary/index.html

当然、今回も搭載する予定である。そして、英文の Abstract を記載するというこの学会の伝統を、論文、研究ノートを問わず、維持していきたいと思う。そして、学会の共通文化を形成していく手段の一つとして、「投稿論文執筆要領」（暫定版）も掲載した。論文の内容はもちろんのこと、その形式についても、改良を加えつつ洗練されたものにしていきたいと思う。

小松昭英